

# 中国東北地方・中小都市住民のスポーツの実態と課題に関する研究 —吉林省通化県快大地区の事例—

張 航 丸山 富雄

キーワード：大衆スポーツ、スポーツ参加、事例研究、中国東北地方

## Present situations of sports and problems in a small town in Tohoku District of China —A case of Kaidai area of Tsuka Prefecture, Jilin Province—

Cho Ko and Tmio Maruyama

### Abstract

This research aimed at clarifying the present conditions of public sport and its problems in a small town in Tohoku district in China. Emphases of the investigation were put on the sport environment and sports activities of the residents in the area. Questionnaires were distributed through students in elementary, secondary and senior high schools to their guardians; 450 sheets were returned (56.3%) in a week in September, 2004. Observations of sports activities were pursued at the "Union Park" for 1 hour during 5:30 and 6:30 for 6 days in October, 2004. The results obtained were as follows:

1. Sport facilities provided were almost all in schools and were not opened for public use. Sports clubs and events were poorly provided.
2. About one third of the residents participated regularly in exercises and sports once a week, the rate of which was identical or better compared with that of Japanese.
3. One of the main reasons for participating sports was "health promotion" and those for not participating were "no opportunity", "no knowledge" and "no places and/or facilities".
4. Only 11% of the residents applied to clubs and circles, but more than 70% of them wanted to belong to those.

The results seem to suggest more positive promotion policies for people's sports participation so as to be adjusted to their economic and cultural conditions.

Key words: public sport, sport participation, case study, Tohoku district in China

## 1. 緒言

### 1. 中国スポーツ界の現状

中国では鄧小平の“改革開放政策”以来、経済が非常な速さで発展し、国民の生活も豊かになりつつある。それに伴い、政府も国民もますますスポーツを重視するようになってきた。近年、中国選手の国際スポーツ大会での活躍は目覚しく、アテネオリンピックではロシアを抜き、アメリカに次ぐスポーツ大国となった。国内でもサッカーや卓球などのリーグ戦が盛んに行われ、一部の競技スポーツは世界のトップレベルにまで発展してきた。北京が 2008 年オリンピックの開催地となったことは中国のスポーツ事業の目覚ましい進歩の証である。

しかし中国の生涯スポーツや大衆スポーツに関しては、「中国のスポーツはまだまだ発展途上といわざるを得ない。例えば公共スポーツ施設の数や質、スポーツ参加者の数、大衆スポーツ活動の内容や種類などは、いわゆるスポーツ先進国にはるかに及ばないのが現状であろう」<sup>1)</sup>と指摘されている。1994 年、中国国家体育総局は「社会体育指導センター」を設立し、また 1995 年には、政府によって「国民健康づくり計画」(全民健身計画綱要)が制定された。そこでは全国規模での大衆スポーツの振興が提唱されている。その後、徐々にではあるが住宅団地や公園内に各種の健康づくりの設備が整備され、大衆スポーツも盛んになってきている。都市部の住民や若者のスポーツ参加は目覚ましいものがあるが、その活動場所の多くは粗末な屋外施設であったり、スポーツ参加の動機づけとなる市民のスポーツ大会等の開催もほとんどない。全国調査<sup>2)</sup>によれば、スポーツ参加者の 23.2%が公共のスポーツ施設で行っているだけである。なおスポーツ施設の開放率は 34.6%であり、常に開放しているスポーツ施設はわずかに 44.1%となっている。さらには農村部においてはスポーツはまったく普及しておらず、ほとんど省みられることもない状況である。「国民健康づくり計画」から 10 年近く経つが、その理念や具体的内容の達成にはまだまだ時間がかかるようである。

このことは中国政府のスポーツ事業の予算を概観しても首肯できることである。競技スポーツへの支出が突出しており、大衆スポーツ振興のための支出は非常に少ない。1995 年の国のスポーツ事業の総支出は 27.78 億元であるが、その中で大衆スポーツへの支出はわずかに 800 万元 (0.3%) であった<sup>3)</sup>。またスポーツ施設の大半は学校の体育施設であり、全国のスポーツ施設の 67.1%を占めている<sup>2)</sup>。しかし学校体育施設の内容は、例えば日本の学校の体育館、プールなどはあまりなく、ほとんど屋外のバスケットボールコートなどの施設である。学校体育施設の開放を含め、公共のスポーツ施設の数やその運営にも大きな課題がある。このように、中国では現在、人々の健康づくりへの意識やスポーツ欲求は高まってい

るにもかかわらず、スポーツ施設やクラブ、指導者などスポーツ参加のための基礎的な条件はまだ整っていないのが現状である。

### 2. 研究目的

「国民健康づくり計画」ではその冒頭において、「大衆スポーツを広範囲に普及し、国民の体力を強化し、もって中国社会主義現代化のための事業を発展・推進するため、特に本計画を制定した。」と述べている。「計画」が制定されてから 10 年近くになる。経済の発展にしたがって、大都市を中心に大衆スポーツ活動が盛んになり、注目もされるようになった。中国の大衆スポーツの発展は新たな時期を迎えているといつてよい。

しかし中国の国土は広大で、また約 14 億人の多民族国家であり、多くの国民は中小都市や農村部に居住している。中国では現在も大都市と農村部では様々な面で大きな格差や貧富の差があり、人々のライフスタイルも大きな違いを持っている。これまでの中国大衆スポーツに関する研究はほとんどが経済的に発達している大都市を中心に研究され、多くの国民が住んでいる中小都市や農村部の実態についての研究はほとんどない。経済発達地域のみでの分析では、中国の大衆スポーツの実態をはっきりと把握することはできない。経済的にあまり発達していない中小都市や農村部における大衆スポーツの実態を研究することによって、中国の大衆スポーツの問題や課題をより明らかにすることができるであろう。

そこで本研究では、中国吉林省通化市の郊外住宅地域である快大地区住民のスポーツ実施の実態や直面する問題を探り、そこでの課題を明らかにすることを目的とする。この研究は快大地区を事例とするが、そこで明らかになった実態や課題は、中国東北地方中小都市のスポーツの実態を代表するものと言える。

## II. 研究方法

### 1. 快大地区の概要

快大地区は中国吉林省南部の中心都市である通化市から約 20 キロ離れた、通化県の県庁所在地のある新興住宅地域である。通化県は山間地区で、交通の便も悪い地域であったが、「改革開放政策」以降、交通網が整備され、快大地区も急速な勢いで発展していった。

快大地区は 10 年ほど前から政府の方針により公務員や工場労働者が入居するマンションが盛んに建てられ、公園・広場も含め整備された。町づくりを重視すると同時に、自然の恵みを利用した製菓とワインの二つの産業の振興に力を入れている。快大地区の人口は 56601 人 (2004 年)であり、この 10 年間で 6.4%増加している。また 30 歳代以下の人口が総人口の 42.4%、60 歳代以上が 7.3%であり、比較的若年層が多い新興住宅地域である。

2. 調査方法

1) 快大地区住民の運動・スポーツ実施に関する調査

(1) 調査対象・時期、および方法

快大地区小・中・高校生の保護者を対象に、2004年9月10日から1週間にわたり、スポーツ実施に関するアンケート調査を行った。配布・回収の方法は児童・生徒への依頼とした。有効回収数は450通で、有効回収率は56.3%である。

(2) 調査対象者の属性

今回の調査では、児童・生徒の保護者を対象としたことから、年齢では30歳代が67%、40歳代が19%を占める中年層が大半である。学歴は高校と大学以上の割合が約68%であった。特に、大学以上の学歴が三分の一以上と高学歴の地区である。

職業をみると、工場労働者、事務・管理職、教員で大半を占めている。快大地区は工場が多いため、工場労働者と事務・管理職の人が多かったと考えられる。

世帯月収は、2000元以下の対象者が72.8%を占める。調査対象者は若い世帯が多いこともあり、一般的な世帯収入よりもやや低いと考えられる。

表1-1 調査対象者の性・年齢内訳

	20代	30代	40代	50代以上	総計
男性	12 5.7%	134 63.5%	46 21.8%	19 9.0%	211 100.0%
女性	16 6.7%	168 70.3%	39 16.3%	16 6.7%	239 100.0%
計	28 6.2%	302 67.1%	85 18.9%	35 7.8%	450 100.0%

表1-2 調査対象者の社会階層

	対象者の属性	構成率
学歴	学歴なし	0.4%
	小学校	3.1%
	中学	28.5%
	高校	30.6%
	大学以上	37.3%
職業	なし	31.1%
	工場労働者	23.0%
	農業	2.6%
	事務・管理職	29.8%
	教員	20.3%
	サービス業	8.2%
	学生	0.7%
世帯月収	その他	15.4%
	~2000円	72.8%
	2000円~3000円	19.5%
	3000円~5000円	5.7%
	5000円~10000円	1.4%
10000円~20000円	0.7%	
20000円~	0.0%	

2) 定点定時観察

2004年9月26日から10月1日までの6日間、朝の5時半から6時半までの1時間、快大地区の“団結”広場において、どのような年齢層の人がどのような運動やス

ポーツを行っているかの観察を行った。

“団結”広場は快大地区の中心部にあり、2002年から整備がはじまり2004年5月に完成した。面積は約20000平方メートルであり、広場の中には、ケートボール場も併設されている。また鉄棒や平行棒、腹筋運動のための固定運動器具も充実している。

3. 分析方法

快大地区住民へのスポーツ実態調査に関しては、性、年齢層ごとにクロス集計を行い分析した。また同じ質問項目については、日本の「体力・スポーツに関する世論調査(2004)」<sup>8)</sup>などのデータと比較検討を行った。

III. 結果と考察

1. 快大地区のスポーツ環境の概要

快大地区のスポーツ施設は大半が小中学校の体育施設である。しかし、それら体育施設は住民に開放されておらず、同様に職場のスポーツ施設はその従業員にのみ開放され、一般の人は使うことはできない。したがって、地区住民のほとんどの人がスポーツ施設を使用できず、広場での運動やスポーツ、登山などを行っている。

また運動やスポーツのクラブやサークルは、民間のアスレチック・クラブが1つ、主に高齢者が参加する体操や太極拳など伝統的な種目のサークルがいくつかある。さらにスポーツ大会等のイベントに関しては、年1回の“全県運動会”と県のマラソン大会があるだけで、これらはいずれも能力のある競技者が出場し、一般の人が参加できるスポーツイベントはないのが現状である。

2. 定点定時観察結果

快大地区“団結”広場での早朝1時間の観察結果から、曜日にはあまり関係なく、毎日、平均延べ約135人が参加し、行っていた種目は体操、太極拳、バレーボールなどの球技、固定運動器具を使った運動などであることがわかった。性・年齢別にみると、女性がやや多く、また40歳代以上の参加者が多く、20歳代の参加者はほとんどいなかった。体操や太極拳の参加者が最も多く、皆、服装を揃え、曲に合わせて、体操や太極拳を行っていた。最近整備された鉄棒や腹筋運動器具などの固定運動器具は、各年代の人々がよく使っていた。バレーボール、サッカー、ゲートボールは正式なゲームではなく、指導者もおらず、愛好者達が集まり自分達でルールを工夫し遊んでいるといった様子であった。6日間の観察を通して、快大地区の住民は広場を利用して、早朝からいろいろな運動に積極的であることが分かった。

表2 定点定時観察結果

	5:30	6:00	6:30	延べ人数
9月26日 (日)	体操[40歳～、29人(男7人、女22人)]	ローラー・スケート[30歳～50歳、5人(男2人、女3人)]		145人
	太極拳[40歳～、30人(男9人、女21人)]	バレーボール[30歳代、11人(男9人、2人)]		
	固定運動器具[各年代、26人(男19人、女7人)]	[各年代、40人(男24人、女16人)]		
		ゲートボール[60歳～、4人(男4人)]		
9月27日 (月)	体操[40歳～、30人(男5、女25人)]	バレーボール[30代、9人(男6人、3人)]		137人
	太極拳[40歳～、36人(男8人、女28人)]	ゲートボール[60歳～、1人(男1人)]		
	固定運動器具[各年代、20人(男14人、女6人)]	[各年代、36人(男25人、女11人)]		
		サッカー[30歳代、5人(男5人)]		
9月28日 (火)	体操[40歳～、13人(男2人、女11人)]	ローラー・スケート[30歳～50歳、3人(男3人)]		104人
	太極拳[40歳～、30人(男12人、女18人)]	バレーボール[30歳代、10人(男8人、2人)]		
	固定運動器具[各年代、20人(男14人、女6人)]	[各年代、28人(男19人、女9人)]		
9月29日 (水)	体操[40歳～、29人(男9人、女20人)]	バレーボール[30歳代、4人(男4人)]		130人
	太極拳[40歳～、30人(男14人、女16人)]	ゲートボール[60歳～、4人(男4人)]		
	固定運動器具[各年代、25人(男18人、女7人)]	[各年代、38人(男21人、女17人)]		
9月30日 (木)	体操[40歳～、38人(男10人、女28人)]	バレーボール[30歳代、9人(男8人、1人)]		140人
	太極拳[40歳～、32人(男10人、女22人)]	サッカー[30歳代、6人(男6人)]		
	固定運動器具[各年代、20人(男15人、女5人)]	[各年代、35人(男25人、女10人)]		
10月1日 (金)	体操[40歳～、31人(男9人、女22人)]	バレーボール[30歳代、11人(男9人、2人)]		152人
	太極拳[40歳～、41人(男6人、女35人)]	ゲートボール[60歳～、3人(男3人)]		
	固定運動器具[各年代、22人(男20人、女2人)]	[各年代、38人(男28人、女10人)]		
		サッカー[30歳代、6人(男6人)]		

## 3. 快大地区住民のスポーツ実施状況

## 1) スポーツ実施の有無と参加頻度

この1年間のスポーツ実施の有無に関しては、男性が約80%、女性は約70%、全体で74%の者が、運動やスポーツを行ったと回答している。また年代別でみると、男性は40歳代、50歳代で運動やスポーツを行う者が減少するのに対し、女性の場合には20歳代、30歳代の若年層の方が運動していないことがわかった。

次に運動やスポーツを行った頻度を聞いたところ、全体で「週に1～2日(年51～150日)」と答えた者の割合が19.3%と最も多く、次に「月に1～3日(年12～50日)」の16.9%であった。「週に3日以上(年151日以上)」と「週に1～2日」を合わせた定期的なスポーツ参加者は32.9%(男性は40.2%、女性は26.3%)であった。

スポーツ実施の有無とその参加頻度を日本のデータ<sup>8)</sup>と比較すると、運動やスポーツを行っている人の割合は、全体で中国74%、日本68.6%で、今回の対象者の方がよく運動やスポーツを行っているといえる。また週一日以上の定期的なスポーツ参加者は、中国44.2%、日本56.5%で日本が高くなった。しかし、今回の中国のデータは30歳代、40歳代が中心であり、その年代では快大地区のほうが高いことがわかった。

表3 スポーツ実施と参加頻度の中日比較

		参加していない	参加している				
			年に1～3日	年に4～11日	1ヶ月に1～3日	週に1～2日	週に3日以上
男性	中国	20.4%	9.3%	20.9%	19.8%	28.5%	21.5%
	日本	26.4%	10.9%	11.2%	27.3%	24.3%	25.8%
女性	中国	31.0%	11.5%	23.6%	26.7%	23.6%	14.5%
	日本	35.9%	7.8%	9.5%	18.3%	30.1%	33.1%
計	中国	26.0%	10.4%	22.3%	23.1%	26.1%	18.1%
	日本	31.4%	9.4%	10.4%	22.9%	27.2%	29.3%
20代	中国	17.9%	4.3%	28.1%	26.1%	21.7%	21.7%
	日本	19.8%	13.4%	17.2%	30.1%	22.6%	15.1%
30代	中国	26.5%	12.2%	23.0%	23.0%	26.6%	15.3%
	日本	22.2%	16.7%	17.9%	25.4%	29.4%	10.7%
40代	中国	28.2%	8.2%	18.0%	23.0%	27.9%	23.0%
	日本	27.6%	12.1%	12.1%	32.6%	19.1%	23.7%
50代	中国	22.9%	7.4%	22.2%	18.5%	22.2%	29.8%
	日本	30.7%	7.8%	9.3%	22.1%	31.1%	29.1%

## 2) スポーツ実施種目(複数回答)

スポーツを行っている対象者(333名)に対し、行っているスポーツの種目を聞いたところ、ウォーキング(ジョギングを含む)(61.0%)、登山(53.2%)、バドミントン(45.3%)、縄跳び(25.5%)、球技(バスケットボール、バレーボール、サッカー)(20.4%)、固定運動器具(19.5%)などが上位に挙げられた。

性別に見ると、男性ではウォーキング、登山、バドミントン、球技、固定器具などが、女性では登山、ウォーキング、バドミントン、縄跳びなどが、それぞれ上位に挙げられている。

年齢別に見ると、各年齢層で「ウォーキング」と「登山」を挙げた者の割合が高かった。また、「バドミントン」は20歳代を中心とした若年層がよく行っているといえ

る。

日本の調査結果と比較して見ると、上位5位までの種目は表6のとおりである。ウォーキングや軽い球技は中日いずれでもよく行われている。また特徴的なことは、中国におけるそれぞれの種目における参加比率の高さである。このことはこれらの種目の参加者が多いことと同時に、日本の場合には参加している種目が多様であるのに対し、快大地区ではウォーキングと登山、バドミントンなどの種目に偏りがみられることを意味している。また快大地区は山間地区であり、登山が多いといえる。

表4 実施種目の中日比較

国	男性		女性	
	中国	日本	中国	日本
1位	ウォーキング 66.7%	ウォーキング 32.8%	登山 55.8%	ウォーキング 41.1%
2位	登山 50.6%	ボウリング 16.8%	ウォーキング 55.2%	体操 18.0%
3位	バドミントン 39.9%	ゴルフ 15.2%	バドミントン 51.5%	ボウリング 10.0%
4位	球技 28.6%	軽い球技 14.6%	縄跳び 31.5%	軽い球技 9.4%
5位	固定器具 23.8%	体操 13.6%	固定器具 15.2%	軽い水泳 7.3%

### 3) 運動・スポーツの実施理由 (複数回答)

運動やスポーツの実施理由では、「健康・体力づくりのため」を挙げた者の割合が82.0%と高く、以下「運動能力向上のため」(36.0%)、「楽しみ、気晴らしとして」(31.2%)、「子供の体力の向上のため」(30.0%)、「ストレス解消のため」(24.9%)などの順となっている。

性別で見ると、「運動能力向上のため」と小さい時からそのスポーツに親しんでいるという「スポーツ習慣」の項目で男性が、「子供の体力の向上」で女性が高く、男女で大きな相違が見られた。年齢別ではそれほど大きな違いはみられなかった。

日本の調査結果との比較では、中日ともに「健康・体力づくり」(中国82.0%、日本55.2%)が第1位となっているが、中国の値が非常に高いこと、また「楽しみとして」(中国31.2%、日本54.5%)は日本の値が高いことが特徴的であり、中国では健康づくり、日本では楽しみを重視して運動やスポーツを行っていることがわかった。また中国は運動能力の向上を挙げた者の割合が36.0%となっているが、日本の場合には3.0%前後と低くなっている。逆に「友人・仲間との交流」では日本が33.8%であるのに対し、中国では12.0%と低く、両者には大きな違いが表われた。

表5 運動・スポーツの実施理由の中日比較

国	男性		女性	
	中国	日本	中国	日本
1位	健康づくり 86.3%	楽しみとして 57.5%	健康づくり 77.6%	健康づくり 56.9%
2位	運動能力の向上 44.0%	健康づくり 53.6%	子供の体力の向上 34.5%	楽しみとして 51.5%
3位	楽しみとして 29.2%	運動不足を感じるから 36.6%	楽しみとして 33.3%	運動不足を感じるから 45.3%
4位	子供の体力の向上 25.6%	友人との交流 35.5%	運動能力の向上 27.9%	友人との交流 32.2%
5位	ストレス解消 22.6%	家族との触れ合いとして 10.9%	ストレス解消 27.3%	美容や肥満解消として 16.1%

### 4) 運動・スポーツの実施場所 (複数回答)

運動やスポーツの実施場所については、「公園や広場」を挙げた者の割合が64.6%と非常に高く、以下「公的施設」36.6%、「自宅」32.4%、「道路」29.4%、「団地の空地」24.0%などの順となっている。

日本のデータ(このデータのみ「笹川スポーツ財団(2002)」<sup>10)</sup>)と比較してみると、快大地区ではスポーツ施設はほとんどないことから、日本のような「体育館」「グラウンド」などの回答は得られなかった。しかし逆に公園や広場が整備されており、そこで個人や家族で運動やスポーツをしているようである。

表6 運動・スポーツの実施場所の中日比較

	1位	2位	3位	4位	5位	6位
中国	公園や広場 64.6%	公的施設 36.6%	自宅 32.4%	道路 29.4%	団地の空き地 24.0%	森や草原 21.9%
日本	道路 56.9%	自宅 24.2%	体育館 23.4%	公園 21.5%	ボウリング場 18.7%	グラウンド 14.5%

### 5) 非実施者の不参加理由 (複数回答)

運動やスポーツを行っていないと答えた者(117名)に不参加の理由を聞いたところ、「時間がない」を挙げた者の割合が61.9%と高く、以下「機会がない」(23.9%)、「スポーツが嫌い」(17.9%)などの順となっている。

男女で比較すると、ほとんどの項目で女性が高く、特に「時間がない」や「練習方法が分からない」、「スポーツが嫌い」などでは大きな差がみられ、女性が運動やスポーツ条件に恵まれていないことがわかる。

日本の調査結果と比較してみると、両国ともに「時間がない」が第1位となっている。「時間がない」を含め、「機会がない」、「場所・施設がない」、「指導者がいない」の4つの調査結果を見ると、いずれも中国のほうがその値は極めて高く、このことは中国ではスポーツを行う上での基礎的な条件が整っていないことを示しているといえよう。

表7 非実施者の不参加理由の中日比較

	中国			日本		
	男性	女性	計	男性	女性	計
時間がない	52.3	67.6	61.9	32.4	46.8	41.2
機会がない	20.9	25.7	23.9	7.6	8.3	8.1
スポーツは好きではない	9.3	23.0	17.9	7.6	9.3	8.7
特に理由がない	14.0	20.3	17.9	17.2	9.8	12.7
練習方法がわからない	7.0	20.3	15.4	—	—	—
場所・施設がない	16.3	14.9	15.4	2.7	2.5	2.5
指導者がいない	9.3	13.5	12.0	0.4	0.7	0.6
体が弱い	11.6	12.2	12.0	14.5	11.5	12.7
お金がかかる	7.0	9.5	8.5	4.6	2.2	3.1
仲間がいない	4.7	8.1	6.8	7.3	6.4	6.7
年をとった	9.3	2.7	5.1	21.4	18.1	19.4

## 6) 非実施者の今後の参加意向

運動やスポーツを行っていない者に今後の参加意向を聞いたところ、「あり」と答えた者の割合が36.8%、「なし」11.1%、「迷っている」52.1%となり、男女による違いはほとんどなかった。「迷っている」人を参加に導くきっかけなどが必要である。

## 7) 非実施者の運動・スポーツ参加の障害(複数回答)

運動やスポーツを行っていない者に、「どんな問題が解決されれば参加するか」を聞いたところ、「時間ができたら」と答えた者の割合が58.5%、「興味がわいたら」が41.5%と高く、以下「施設・用具」(39.0%)、「指導者」(31.7%)などの順となった。時間や興味という主体的な問題の他に、施設や用具、また指導者などの客体的な条件が障害となっていることも分かった。

## 8) クラブの加入状況

調査対象者全員にクラブや同好会への加入状況を聞いたところ、「加入」が10.6%、「加入していない」が89.4%となり、日本のクラブ加入率(15.8%)の方がやや高かった。

性別では男性(男13.0%、女8.5%)の方が加入率は高く、年代別では女性の30歳代が極端に低い値となった。

## 9) 加入しているクラブ・同好会の形態

加入している「クラブ・同好会の形態」では、「団地内クラブ」を挙げた者の割合が34.8%と高く、以下「仕事先」(23.9%)、「民間」(21.7%)、「その他」(19.6%)の順となった。

日本の調査結果と比較してみると、日本では地域のクラブが半数以上(53.8%)を占めるのに対し、中国(団

地内)では34.8%である。一方「職場のクラブ」は23.9%と日本より高くなっている。中国ではまだ地域のスポーツクラブがそれ程発達していないことと快大地区では企業が多いため、このような結果になったといえる。

表8 クラブの形態の中日比較

	1位	2位	3位	4位
	中国	地域のクラブ 34.8%	職場のクラブ 23.9%	民間のクラブ 21.7%
日本	地域のクラブ 53.8%	民間のクラブ 18.3%	職場のクラブ 17.1%	県内のクラブ 8.7%

## 10) 不参加者のクラブ加入希望

クラブ・同好会に加入していない者の加入希望は、「ある」と回答した者の割合が71.3%であった。日本との比較では、中国のスポーツクラブに対する加入希望が極めて高いことが分かる。

表9 不参加者のクラブ加入希望の中日比較

	ある	なし	わからない
中国	71.3%	28.7%	
日本	23.2%	66.4%	10.4%

## 11) 地域におけるスポーツ振興の効果(複数回答)

調査対象者全員に対し、「地域における運動やスポーツ振興の効果」を聞いたところ、「余暇時間の有効活用」56.1%、「青少年の健全育成」54.5%と高く、以下「市民の健康レベルの向上」(48.8%)、「高齢者の生きがいがづくり」(33.6%)などの順となっている。

年代別では、「青少年の健全育成」は若年層が、「高齢者の生きがいがづくり」では高齢層がより効果を期待している。

日本の調査結果と比較してみると、中国は「青少年の健全育成」「市民の健康レベルの向上」が2位、3位で値も高く、日本よりも教育や健康づくりとしての効果を期待している。一方日本では「家庭内の交流」や「地域のコミュニティの形成」などのスポーツをとおした交流や親睦に期待が大きいといえる。特に注目すべきことは、日本の第3位である「地域の形成」が中国の場合は5.6%と非常に低く、地域づくりという視点があまりないといえる。

表10 地域におけるスポーツ振興の効果の中日比較

	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位
中国	余暇時間の有効活用 56.1%	青少年の健全育成 54.5%	市民の健康レベルの向上 48.8%	高齢者の生きがいがづくり 33.6%	スポーツ施設の有効利用 28.9%	家庭内の交流 19.2%	友人との交流 18.5%
日本	高齢者の生きがいがづくり 34.2%	家庭内の交流 26.4%	地域の形成 26.0%	余暇時間の有効活用 23.1%	子どもの体力づくり 23.1%	青少年の健全育成 19.8%	スポーツ施設の有効利用 16.5%

## V. 総括

### 1. 本研究のまとめ

本研究の目的は、経済的にあまり発達していない中国東北地方の中小都市や農村部における大衆スポーツの実態を研究することによって、中国の大衆スポーツの問題や課題をより明らかにすることであった。そこで本研究では、快大地区住民のスポーツ参加状況などについてのアンケート調査を実施し、分析検討を行った。その結果以下のことが明らかになった。

- ① 今回の快大地区の調査では、その対象者が若い世代が多いということもあり、かなり運動やスポーツを行っていることがわかった。週1日以上運動やスポーツを行う定期的なスポーツ参加者は日本のその年代の人と同様か、それ以上である。しかし、参加している種目に関してはウォーキングや登山、バドミントンなどに集中し、かなり限定されたものとなっている。それはスポーツ施設や体育指導者などの客観的な条件に制約されていると考えられる。一週間にわたる公園での定点定時観察の結果でみると、住民は早朝の運動やスポーツにかなり多くの人々が積極的に参加していることが分かった。そこで行っている種目は主に太極拳や太極剣など伝統的な運動で、特に中高年層の普段の運動は西欧型のスポーツではなく、伝統的な運動や踊りであるといえる。
- ② 調査結果の中日比較では、スポーツ参加の理由については、中国の方が健康づくりを重視しており、また地域でのスポーツの効果として、中国では「地域づくり」の視点がないことも指摘された。さらにスポーツに参加していない理由では、中日とも「時間がない」が第1位となっているが、「機会がない」、「場所・施設がない」、「指導者がいない」の3つの項目では、いずれも中国のほうが極めて高く、このことは中国ではスポーツを行う上での基礎的な条件が整っていないということを示しているといえよう。
- ③ クラブの参加状況については、クラブに加入している調査対象者の割合は中国 10.6%、日本 15.8%で、日本のほうがやや高かった。さらに、加入しているスポーツクラブの形態をみると、日本では地域のクラブが半数以上(53.8%)を占めるのに対し、中国では34.8%で、一方「職場のクラブ」が23.9%と日本より高くなっている。中国ではまだまだ地域のスポーツクラブが未発達なことと、快大地区では企業が多いため、このような結果になったといえる。さらに中国では、クラブに加入していない住民のスポーツクラブに対する加入希望は71.3%と非常に高い結果となった。

④ 運動やスポーツを行った場所や形態については、快大地区は公園や広場などの運動やスポーツが行える場所が多く、またよく整備されているが、体育館、グラウンドなど公共のスポーツ施設はあまりないこともあり、住民のほとんどが、それら公園などで、個人あるいは家族で運動やスポーツを行っているといえる。

今後、国や省、市、県などの大衆スポーツ事業の予算の増加や学校・企業など現有のスポーツ施設の有効利用が望まれる。それは快大地区の大衆スポーツがうまく発展するために最も重要なものであろう。さらに、地域の人々が参加し楽しめるスポーツ大会などのイベントの開催があげられる。このような大会が開催されることによって、スポーツクラブやサークルの結成も促進される。今回の調査結果からは約10%の人がクラブに参加しているが、その多くが高齢者の体操や舞踊、また伝統的な武術のサークルで、若者のスポーツサークルはほとんどない。調査結果からクラブ加入希望は71%をこえており、そのためにも、市や県の主催による一般の人が参加できるスポーツ大会等の開催が望まれる。

### 2. 今後の課題

本研究では、中国吉林省通化市の郊外住宅地域である快大地区住民のスポーツ実施の実態や直面する問題を探り、そこでの課題を明らかにし、今後の中国大衆スポーツのための提言を図ることができた。しかしこの研究を通していくつかの課題も出てきた。1つ目は今回の研究目的は中国の中小都市住民におけるスポーツ実施の状況を明らかにすることであったが、快大地区は新興住宅地域であり、必ずしも研究目的を満たす地域とは言えるものではない。今後、さらに地域を広げて調査を行う必要がある。2つ目は地域におけるスポーツの効果として、調査結果からは「地域づくり」の視点のみられない結果となったが、その原因を明らかにできなかったことである。おそらく子どもの頃からのスポーツ教育やスポーツへの社会化に帰因するものと思われる。さらに3つ目は、先行研究を集めた時期、中国の大衆スポーツに関する調査研究は非常に少なかった。中国は広大な国であり、人口も多いため、全国調査は不可能である。したがって、各地域の大衆スポーツに関する調査研究が望まれる。それら調査結果の蓄積によって、中国の大衆スポーツの実態をはっきりと把握し、望ましいスポーツの政策を展開してほしいと切望する。

## V. 参考文献

- 1) 蔡有志(2000)中国の大衆スポーツ活動の特徴と対策。北京体育大学学报。2000年3月。第23巻第1期。

- 2) 陳孝平 (1996) 東洋と西洋の大衆スポーツの発展の共通点及びその動向. 解放軍体育学院報. 1996年. 第3, 4期.
- 3) 陳孝平 (1995) 国際大衆スポーツの発展成因に関する一考察. 広州体育学院学報. 第15巻第1期
- 4) 李浩坤・陳立農 (2000) 中日米三ヶ国の大衆スポーツの比較研究. 広州体育学院学報. 2000年3月. 第20巻第1期.
- 5) 李相如 (2002) 日本の大衆スポーツと社会体育指導員の発展概況. 首都体育学院報. 2002年12月. 第14巻第4期.
- 6) 丸山富雄・日下裕弘・生沼芳弘編著 (1994) 現代生活とスポーツ. 中央法規出版.
- 7) 丸山富雄編著 (1994) 現代スポーツ論. 中央法規出版.
- 8) 内閣府 (2004) 体力・スポーツに関する世論調査.
- 9) 秦風氷・潘桂芝・方萍萍 (2000) 現在の中国大衆スポーツの発展現状調査. 中国体育科技. 第36巻第1期.
- 10) 笹川スポーツ財団 (2002) スポーツライフデータ 2002.
- 11) 孫倩 (2002) 大衆スポーツ施設の建設に関する考察. 文化広場 建築. 2002年第1期.
- 12) 王文仁 (1994) 中国大衆スポーツの経済利益. 寧夏大学学報. 第15巻第3期.
- 13) 王正倫 (2001) 「大衆スポーツの社会学視点」-先進国の大衆スポーツの印象及び示唆-南京体育学院報. 2002年12月. 第15巻第6期.
- 14) 肖榮 (2001) 外国の大衆スポーツの発展から得られた示唆. 鄖陽師範高等専科学報. 2001年12月. 第21巻第1期.
- 15) 熊茂湘・王華安 (2002) 中国におけるスポーツ未発達地域のスポーツ生活化に関する研究. 武漢体育学院学報. 2002年1月. 第36巻第1期.
- 16) 張永軍 (2000) 国際大衆スポーツの発展と中国健康づくり運動. 濰博学院報. 2000年3月. 第2巻第1期.
- 17) 趙忠偉・李衛平 (2002) 「スポーツ人口の現状と発展に関する研究」-遼寧省を例として-. 体育与科学. 2002年1月. 第23巻第1期.